

前の質問と少し重なりますが、人々の反応がどうであれ、また自己満足ではなく相手を気遣い、エホバからの幸福な良い知らせを伝える伝道活動を生き方、ライフワークとしている本当のクリスチャンは、世界中で一番幸福な人々だと思いませんか？

はい、そう感じる理由はかなり深いところにあると思います。

ただ、「世界中で一番幸福な人々」と断定するより、**「そのような生き方には、非常に大きな幸福を生み出す要素が含まれている」**と考えると、聖書の考えにもよく合います。

特に大きいのは、次の3つではないでしょうか。

- **自分より大切なもののために生きる**
「自分がどう評価されるか」ではなく、エホバを愛し、人のためになることをしたいという目的があります。
- **相手の幸福を願って行動する**
「伝道できた」「成果が出た」という自己満足ではなく、相手が聖書の希望を知って幸福になれることを願います。ですから、反応が良くなくても、愛から行ったという喜びが残ります。
- **自分の力だけで頑張るのではない**
「エホバに喜ばれることをしたい」という思いが、日々の生き方の軸になります。イエスが「受けるより与える方が幸福」と教えたこと(使徒 20:35)も、まさにこの点と重なります。

そして、ここがとても美しいところだと思います。

伝道の相手が自分に感謝してくれなくても、伝道したことによる幸福まで奪われるわけではありません。

なぜなら、その人を気遣って良い知らせを伝えたという行為そのものが、エホバへの愛の表現になっているからです。

もちろん、本当のクリスチャンも落ち込んだり、疲れたり、伝道したくないと感じることはあるでしょう。それでも、長い人生を振り返った時に、

「自分の時間や力を、自分だけのためではなく、エホバと人々のために使ってきた」

と思えるなら、それは非常に深い満足につながるのではないのでしょうか。

そして私は、「伝道を愛すること」と「人を愛すること」は切り離せないと思います。

「伝えなければならぬ」という義務感だけなら、反応が悪い時に続けるのは難しい。でも、「この人にも幸せになってほしい」という愛が動機なら、相手の反応を尊重しながら、それでも良い知らせを伝えることができます。

そう考えると、伝道は単なる「宗教活動」ではなく、人を愛することを毎日の生活の中で実践するライフワークになり得ます。

それこそが、長く続く幸福の一つの形なのかもしれません。

この利他的な愛の深さは、その人本人が幸福を感じるというより、人生を充分満喫する方法やツールで、しかも周りの人に幸福や喜びをもたらすものとするのは、正しいでしょうか？

はい、とても興味深い捉え方だと思います。私は、**「幸福を直接追いかけるのではなく、他者を幸福にする生き方そのものが、結果として自分の人生を豊かにする」**という意味なら、かなりの的を射ていると思います。

ただ、「本人は幸福を感じない」という意味ではないでしょう。

むしろ、

利他的な愛 → 人に与える → 人の喜びを見る → 自分も深い満足を得る

という循環に近いと思います。

例えば伝道でも、「自分が良い気分になるために人に話す」のではなく、

「この人が聖書から希望を見つけて、少しでも幸せになればいい」

という気持ちで接する。その結果、相手の表情が明るくなったり、人生について考えるきっかけを得たりすると、自分の人生にも『自分は誰かのために生きることができた』という深い喜びが返ってくるわけです。

そして面白いのは、これが「幸福を得るためのテクニック」とは違うことです。

もし、

「人に親切にすれば、自分が幸福になれる」

という計算で親切にするなら、ある意味ではまだ自分中心です。

一方、

「この人のためになるなら、自分がどう感じるかは二の次」

という愛になると、不思議なことに自分自身の人生も非常に豊かになる。

イエスの「受けるより与える方が幸福」という言葉(使徒 20:35)は、まさにこの逆説を表しているように思います。

ですから、「人生を充分満喫する方法やツール」という表現を少し変えるなら、

「利他的な愛は、人生を最大限に生かすための生き方そのもの」

と言えるかもしれません。

しかも、その生き方によって自分だけでなく、家族、仲間、伝道で出会う人々、さらには見知らぬ人にまで幸福を広げられる。そこに利他的な愛の非常に大きな魅力があるのだと思います。

この愛を培うには愛を示す日々の目立たないものも含めた行動が大切で、この点でやはり伝道活動は大きな助けになりそうですね？

はい、まさにそうだと思います。むしろ、愛は「愛そう」と思うだけではなかなか深まらず、日々の具体的な行動によって少しずつ培われるものなのだと思います。

そして、その意味で伝道活動は非常に良い「愛を実践する場」になり得ます。

例えば伝道では、目立つ成果がなくても、

- 相手の話を注意深く聴く
- 相手の事情や気持ちを尊重する
- 聖書の言葉を、その人に役立つように考えて選ぶ
- 関心を示さなくても腹を立てずに接する
- 忙しい人には無理強いせず、相手の都合を優先する
- 何度も断られても、その人を「伝道の成果」としてではなく、大切な一人の人として見る
- 小さな関心の変化を喜び、自分の功績にしない

こうした一つ一つは、外から見ると非常に地味です。でも、実はそういう行動こそが利他的な愛の筋肉を鍛えるのではないのでしょうか。

そして興味深いのは、伝道によって愛を示す相手は、必ずしも自分を好きになってくれる人ではないことです。

そこに大きな意味があります。

「自分を好いてくれる人に親切にする」のは比較的簡単ですが、自分に何も返してくれない人にも、その人の幸福を願って良いことをする。これはかなり純粋な愛を育てる訓練になります。

イエスも、「敵を愛し、あなたたちを憎む人に善を行いなさい」と教えました。(ルカ 6:27)

ですから伝道は、単に「良い知らせを人に伝える活動」というだけでなく、

①人を知る

→ ②人を気遣う

→ ③人のために時間を使う

→ ④相手の反応を尊重する

→ ⑤それでも善意を示す

→ ⑥少しずつ愛が深くなる

という、愛を実践する日々の学校の様な役割も果たせると思います。

そして以前お話しした「伝道をライフワークとして愛する」という点ともつながりますね。

伝道によって人に幸福を与えようとする。
その過程で自分自身の愛が深まる。
愛が深まるほど、さらに人の幸福を願うようになる。

この良い循環が続くなら、伝道は単なる「活動」ではなく、その人自身の人格を愛の人へと形作っていき生き方になっていくのだと思います。

素晴らしい解説です。

ありがとうございます。😊
こういうテーマは考えれば考えるほど奥深いですね。

特に私は、**「愛は感情というより、繰り返し選択する生き方によって育つもの」**という点が大切だと思います。

小さな親切、相手の話を聴くこと、許すこと、誰にも見られていないところで人のために何かをすること。そして伝道で、相手の幸福を願って時間や労力を使うこと。

そうした一見目立たない行動が積み重なって、いつの間にか**「人のために生きることが自分の喜び」**という人格になっていく。

それは、かなり豊かな人生だと思います。🌱